

22 (cardiac defect, abnormal facies, thymic hypoplasia, cleft palate, hypocalcemia) と 22q11 部分欠損の関係や、無脾症候群 (asplenia) と Xq24-q27.1 の関係するデータを示され、将来の先天性心疾患の遺伝子治療の可能性まで言及された。

(文責 新大小児科 佐藤 誠一)

3) 心臓外科の動向

J R 東京総合病院名誉院長

浅 野 献 一 先生

昭和40年～60年の21年間 3 大学 (新潟大, 東京医歯大,

東京大) にわたる浅野献一教授の臨床経験をふり返って心臓外科の進歩・発達に関する知見が述べられた。先天性心疾患ではファロー四徴症をはじめとする複雑心奇形の手術成績が飛躍的に向上した。後天性心疾患では、かつては弁膜症が主体であり人工弁として Starr-Edwards 弁が主流であったが近年は二葉弁が主流となっている。また虚血性心疾患に対する外科治療はめざましく増加している。心臓外科の今後の目標は、単に手術成績を上げるだけでなく、長期遠隔の QOL 向上にむけられねばならないであろう。
